

Title	古代末シリア宗教史研究(二)
Sub Title	A study of the religious development in ancient Syria (II)
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.37, No.4 (1965. 2) ,p.57(421)- 76(440)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19650200-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代末シリヤ宗教史研究 (II)

小川英雄

(II) Allāt 女神崇拜の進化

Dūsarēs 神はセム系諸民族のうち、北アラビアの人々によつてだけ崇拜されたといふ点で、本来地方的な神であつた。しかし、この神に対する崇拜は文献の上でも、碑文の上でも、他の神々に対してかなり優勢であつて、とりわけ碑文上の史料の少かつた十九世紀の研究者たち (W. von Baudissin, G. Rösch⁽¹⁾) は、旧約聖書の宗教との関連から、北アラビア (エジプト) の信仰を單一神教 (Henotheismus) と認めた。しかし又、同時に Herodotus や Arrianus の記事から、Dūsarēs 神と併せても一柱の女神 Allāt も崇拜されたことが知られており、この二柱神及び碑文の研究が進むにつれて数を増した他の神々の間の相互関係についても種々の考察が加えられていた⁽²⁾。この中で、Allāt 女神の神性は後述の通り Dūsarēs 神との対比上重要な意味を持つ。後者について前稿で述べたような神観念の進化があつたとすれば、それに對して Allāt 女神さるのような進化の過程を経たのであらうか。

(A) 神名について。Herodotus (III, 8) は北アラビアの人々は、Dionysos-Orotalt 神と Ūraniē-Alilat 女神とを崇拜する、と述べる。後者の神名のうち、Alilat は原地の言葉 al-ilahat の音訛であり、更にこれは後述するように、碑文の Allāt (Allah の女性形) と同一の女神を指すことは明かである。Allāt は元来普通名詞で「女神」をあらわすが、これが当地では個有名詞化して特定の女神を指したもので、Haurān 地方の Salkhad 出土の碑文 (後述) に

「彼等の女神 Allāt」('LT 'LT THM) である、亘に繋りの普通名詞と個有名詞が区別して用ひられたるのを見ても分る。

このよだな語源上の関係から、Allāt 女神は元來 “pan-semitic” な由来を持つ神であることが知られる。Allah は ilum (アッカド人)、ēl (カナン人)、elohîm, eloah (アーブル人) なども同根の名詞である⁽¹⁵⁾、Dūsarēs 神、また Petra 近郊の山地に由来する神のよだな地方的な神としたやうく關係がわゆるが由来なる。このいふは Arrianus (Anabasis Alexandri, VII, xx, 1) の記述を見てゆけ。それにゆる、アラビア人が崇拜する柱の神のいふ、Ūranos は「天の中にすぐての星たち、とりわけ太陽を含んでゐるが、他の太陽からあらゆる方角に最も大きく最も明白な利益が人間界にゆき渡へる」とはわれ、他方 Dūsarēs 神である Dionysos は「インム人のところの遠征と叫う名聲のために」崇拜される、となつてゐる。この記述には Alexandros 大王の征服についたの暗示があるのかも知れないが、一方を天と地と人との支配者、恩恵者として、他方をインムの遊行者として描いており、両神が決して重要な相関々係を持つてはいなことじを示してゐる。これに対し Origenes (Contra Celsum, C. 37) はアラビア人は Ūraniā と Dionysos のみを神とするが、これ等は男女の性を神格化したものであつて、実は神ではない、むしろ。Origenes はアラビアの二神を性的二元論として捉えてゐることが分るが、これは表面的な觀察である。他のあらゆる史料は両神が宇宙の陰陽二原理として崇拜されたのではないことを示してゐる⁽¹⁶⁾、両者が夫妻の神であつたかどうかについては重大な疑問がある。

(B) Dūsarēs 神の妃。その点についてより詳しく述べると、両神の関係が単に陰陽のそれではなことを示すのと役立つであらう。碑文史料の示すところによると、第一に、ナバテア王國南端の Hegra の墓碑銘 (3 B.C. 又は A.D. 1) は「Dūsharā 妻の MWTBH 又 Amnād の Allāt 女神、又 Manōtō 女神の夫 (夫)」とも云ふ。第二に、Petra の「大墓碑銘」に書かれた長い銘文 (西暦紀元後一世纪) の中で、「我々の柱 (柱) の神 Dūsharā

トルの MWTBH HRYS' は、又アゲトの神々……」⁽⁹⁾ ルル部分がある。第三に、Haurān 地方の一小碑文 (gra-fito) に “MWTBW SLM” ルルのがある。⁽¹⁰⁾ これは等しい史料は、王座・鎮座 (或はそれを構成する祭壇や偶像や和座) と妻・妃を意味する MWTB (Mōthab) が Dūsarēs 神との特別の関係にありだことを示している。

この MWTB の意味についての解説がある。第一はされば Dūsarēs 神の鎮まる場所 (thronus) である、ルル柱頭である。その場合、このように本来神でないものが神として並ぶことについては Wellhausen & Clermont-Ganneau 以来 J. G. Février, E. Littmann, R. Dussaud 等が色々な形で語っている。セム人宗教の “fluidité” (流動性) ルルの幾つかで証明される。即ち、セム人の宗教では咸る神の名称や祭壇等の部分が独自の神格化を受け、独立の神として崇拜されるのである。ルルの場合は、Dūsarēs 神の祭壇全体がやうした神格化をうけたことなどは Dussaud, Dalman, Robinson, Horsefield, Sourdel 等は、後者か Petra の點に (baitylion) ルルの如き全体が MWTB 神においても崇拜される。⁽¹¹⁾ 又、前稿で述べた古鐵上のもの baitylia (?) の図像もこれであるルル。總じて Dussaud は MWTB HRYS' も Dūsarēs 神の 「moventis et datus ritus」 (神) ルル⁽¹²⁾だ。これが女房として兼ねるの謬せ、HRYS' は圓柱祠である、MWTB は「妃・妻」の意であるから、全体として 「(Dūsarēs 神の) 妃である Hariṣā」 である。G. A. Cooke, Cantineau, Robinson, A. Grohmann, Février, F. Hommel 等⁽¹³⁾の訳を支持した。これ等の内の温の女房は今まどのふるい解決をいたさん。たださういふのところにむかひ、Dūsarēs 神に妃がいたとする Dūsarēs-Allāt 圆柱の柱頭上に記された成り立た得ないルルである。ルル、「妃 Hariṣā」の訳を知定する神である

次に、Allāt 女神の分布と進化を考察するならば、この女神が Dūsarēs 神とは対等なペアをなしていたのではないとする、ルル Herodotus が Allat-Allāt 女神を Uraniē と意証した理由が判明するのではないか。

(C) 分布と進化について。イスラム以前の北アラビアでは、Allah 神の崇拜の痕跡は殆んど存在しないが⁽¹⁶⁾、Allāt 女神の方は極めて勢力が強く、Dūsārēs 神よりむろん範囲にわたつて崇拜された。まことに、イスラム教徒の側の史料によるところ、Mecca の南東約六十マイルのムンハルにある Tāyif の山の近くの谷間にわたり、この女神が白い方形の石を中心とする聖域 (hima) で崇拜された。⁽¹⁷⁾ このことは殆んど北アラビアに範囲が限られた Dūsārēs 神の信仰との大きな相違を示す。ナバテアに於ける Allāt 女神の分布は、南方の Hegra の碑文 (上田)⁽¹⁸⁾ の他、もうおなじ北方の Haurān 地方で流行していったことが、これまた既に既に記載された諸碑文によつて知られる。その場所を挙げると、Hebran, Salkhand (上田)⁽¹⁹⁾, Iram, Kafer, Walgha, Qanawat, 'Amra, Tarba, Moushennef, Harran, Damet el-'Alyā, Derā などである。これら等の碑文は殆んどが紀元一世纪のもので、その他の 1 世纪の間に Haurān 地方を母心むかへ中央部に北上進出したナバテア人が、おつゝ一柱の主神 Dūsārēs 神と共に、この女神の崇拜を導入したのである。⁽²⁰⁾ しかし、Dūsārēs 神の北限が Haurān 地方の Batanaea の Suleim で終わつたに拘らず、Allāt 女神の方は Palmyra, Dura-Europos, Homs のようだ、より北方の諸都市にも及んでいた。

その他、Carthago 及 Sardinia (Sulci)⁽²¹⁾、又ペペーナの Corduba も碑文上の証拠がある。海外での分布を概観するといふと、イタリヤの Puteoli,⁽²²⁾ 小アシカの Miletus,⁽²³⁾ ギリシアの Chalcis⁽²⁴⁾、シリア海辺の Sidon なども知られる Dūsārēs 神は、出でつてナバテア人商人が地中海の貿易拠点で奉納したのであるのに対し、Allāt 女神はアラビア系諸民族の町で、原地人によるものとみられるが、これは後者の “pan-semitic” な性格を示す証拠である。

しかし、「女神」を意味する普通名詞がアラビア人の間で特定の神格を表わすようになつたとしても、この性質は極めて複雑で捉え難い。この女神は “Allāt” の名の下に、前五世纪末のナバテア人をはじめとする沙漠のアラビア系諸民族のナーリア定住運動と共に流布し、それがおもにアラビア土着の大女神 (Ba'alath, Astarte) 及シリアの Atargatis 女

神と結合した⁽³⁴⁾。従つてかかるの女神の本来の性格とそれが進化融合をとげて行く過程を明るかにする必要がある。

Herodotus は上記のやうな Allāt と Uraniē の語したが、後者はギリシア神話では Uranos の娘である Aphroditē を指す。この前五世紀のギリシア人は Uraniē-Aphroditē 女神のやうな側面を Allāt 女神の中に見出したのであるうが。また、Février は Uraniē の意味から導いて、「天の女神」が Allāt 女神の本性であり、アラビア人たちは天の光に對して大地の生産力と同じ力を認めていたと述べ⁽³⁵⁾、S. A. Cook が後述の「神々の中 Allāt 女神」の碑文に関する(Cf., Josephus, Ant. Jud., I, 12, 2) サンのやうな女神としての Allāt への犠牲物におひだされ⁽³⁶⁾。しかし、Allāt 女神が本来じつでも天神として崇拜された、といはづ証拠はなきよどおぬ。即ち、Herodotus の “Uraniē” が本来の Allāt 女神の神性に觸及したのではなくとは断言出来ぬ。それに拘らず、極東アラビアは金星(星の、Aphroditē, Venus) が盛んに崇拜されており、宵の明星、明けの明星としての 金星神が Allāt と Al-Uzzah といひの名であらわれた、といふことから、Herodotus の Uraniē は金星としての Aphroditē 女神を意味する、といはづ証がある⁽³⁷⁾。これに従えば、キリスト教時代のキリスト教についての諸史料(後述)によると Venus-Lucifer 女神の崇拜をよく説明出来るが。他方、北アラビア人と南アラビア人の間の関係は必ずしも明確でない、ナバテア人も南アラビアから来たといつて決定的証拠は存在しないことに注意すべし。第三に、上述の Corduba のギリシア語碑文に “Athēnā Allath” (Athēna-Allāt 女神) といつて句があるので、Allāt 女神は又ギリシアの女神 Athēna の性格を持つていたことが分る。先に挙げた Haurān 地方の語碑文中の Athēna がおもて Allāt と等しいものとする研究者が認めている。Allāt 女神のこの性格は戦いの処女神のやうである。極東アラビア(山岳 Tayif) であるの女神は武具と関係があつたらしく⁽³⁸⁾。

るのみならず、Allāt 女神の神性には相互関係のわからぬからへつかの要素——天神的、金星的、戦神的等——があるたぬ、Baethgen さんの女神はむしろ多面的な性格を持つてゐたと見てよろしく。この説明の仕方は回じ著者が Krehl の Dūsarēs 神とのことの説明を引用して、この神の多角性 (“vieleckig”) の性格をはにせした際に回じて、決して問題の歴史的解明とはならない。しかし、Allāt 女神の “pan-semitic” な呼称からむづかしくは本筋で、これ等の多面的な性格の出発した Dūsarēs 神の發展経路を追ふ場合よりも、さくらに大いに困難があつたことは本筋で、これ等の多面的な性格の各々を歴史的發展の経路に沿つて並べかねぬことは容易ではない。むしろ、Allāt 女神に対する崇拜の内容は場所について違つていたのが、シリアに於ける遊牧民の定住運動について、前一节題材の題と、Dūsarēs 神の神観念や崇拜の変化に対応して、題合とみて序々に普遍的な大母神となつて行つたのである。Sourdel は編 1 題以後の Haurān 地方の証拠を検討した後、それ等の点で Allāt 女神の性格 (déesse panthée, déesse polyade, rôles multiples) が、南アラビアの金星や戦争の女神としての Allāt 女神のそれとかなり相違つてゐる事を指摘し、その理由は、シリア沃地の大女神の信仰と題合したたぬにあつた。むしろ、Dea Syria もしく有名な Atargatis 女神や Allāt 女神との神觀念の上の近縁性を主張してゐる。このあたり Nelson Glueck も Transjordan 地方のナバテア人の諸遺跡、むづかし Khirbet Tannur での発掘が示すところ、むしろ Atargatis 女神の種々のソーラーが見つかってゐる。又、Atargatis 女神の碑文は Petra から、Haurān 地方からも発見されたが、Decapolis の 1 の Gerasa 市の守護女神 (Tychē) もしくは流行した Artemis 女神の神話 (déesse polyade) から Atargatis 女神のものである、Rostovtzeff によると、この Artemis 女神は原點アラビア半島の多カーディの半島で Allāt 女神と題合つたのである。

Allāt 女神がこの間に集合つたと頃ねね Atargatis 女神は Membidj-Hierapolis も中東半島のアラビア半島

に大いに流行したシリア沃地の女神で、特に水が万物に与える生命力の象徴として、Hadad 神と組をなしていた。Haurân 地方でせ Allât 女神が泉水の守護神であったことから、両神の組合は想像されるが、特に注目しなくてはならないのは、ナバテア人もその隊商路の地中海への接続点として早くから重視し、やしつヒルキアの商船隊が盛んに出入した Ascalon (Ashquelon) の大女神崇拜である。Herodotus (I, 105) せんじて Úranië-Aphroditë の神殿があり、それは「この女神のむかしではある神社のうちで最も古のものである」もしくは「この女神の正体は、Atargatis であるむかし Astarte もしくはわれるが、両方共に生産力、生殖力、天地のめぐみを司る多面的な力を持つ神 (déesse polyade) であり、上記記載したアラビア人の Úranos に関する Arrianus の言葉が示すところ、「人間界に最も大いなる、最も明白な利益 (óphéleia)」を與える神性である。

やうはうわけど、Herodotus 時代以後、特にヘレニズム時代に急激に流布・発展したアラビア人の Allât 女神の神観念は他のシリアの大女神と共通のもの、即ち Aphroditë-Úranië として天地の生命力創造力の原理をなす神格であったとされよう。その際、Ascalon の大女神と Allât 女神とが混じて Aphroditë-Úranië であるとされたことからも分るようだ、Aphroditë-Venus 浩性格 (例えど、金星) や Úranië 的性格や、必らかに地中海アラビアの原始的 (或は地方的) Allât 女神の信仰からのみ説明する必要はないであらう。勿論、Ascalon のような海港都市の Aphroditë-Úranië 女神と北アフリカの遊牧族の Allât-Úranië 女神では信仰の内容に或る落差があつたことは確かに考へられねじふどあるが、後者の定住運動が進むにつれて地方的な諸要素の結合と、沃地の既成の大地母神崇拜との組合とによるものの信仰内容・神観念が進化したのであらう。次に、Allât 女神の神観念を中心として、その信仰の内容を検討しよう。

(D) 神々の母。Haurân 地方の Salkhad の碑文に、「この神々の母 Allât 女神 ('LT 'M 'LTY') のための神殿 (MSGD) も。Choulla の子 Nachbou これを建つ……」アルハのものが現る。この子は「神々の母」アルハの女神の

称号は、Dussaud & Clermont-Ganneau のよつた有力な学者が読み方について疑いを持ったにも拘ねども、多くの研究者はこの碑文が Allāt 女神の神性を示す重要な史料であることを認めてゐる。なぜなら、「神々の母」 Allāt とは、結局この女神が他の神々及び人の守護のトネにおける全人間界の第一原理であることを意味し、S. A. Cook が主張したよつて、メソポタミアの Ishtar、ペルシアの Anāhita、小アジアの Cybelē 等の大母神と同様、自然の全生命活動、全創造活動の原動力となる、多面的な守護の能力を持つた女神といはんことなるからである。このことは上述のように、Allāt 女神がシリアで Atargatis & Astarte のよつた大母神と接觸し、又アラビア系遊牧民の沃地への定住化と共に進化したといふことと符合する。

このようにヘルラーム時代及びローマ時代の Allāt 女神の神観念が人間界・自然界の生命原理であつた結果として、その祭祀は母性の生殖力の崇拜の形をとり、年々の自然界の循環がより大きな利益をもたらすことを目的とした儀礼をとめらつこととなる。Allāt 女神と人間たちがこののような方法で交わることによつて、女神の創造力が発動される、と考えられた。前稿で述べた Dūsareš 神の生産力の背後にも、Allāt 女神のより根源的な母性としての力が働いていたことが以下の考察で明らかになるであつた。

シリアの Allāt 女神の本性崇拜の史料は主としてキリスト教の著述家が書いたものである。そして、キリスト教倫理から見た場合、いつした母性の生殖力に対する祭祀は極めて淫猥に見えたので、その点に古い信仰に対する攻撃目標が見出された。

ホア、Bar-Hebraeus (Abu'l-Faraj, 1226-1286) は旧約聖書の詩篇 (XII, 8)⁽⁵⁵⁾ に対するシリア語の注釈書の中で、そこに出て来る「極めん」 (Höhe der Söhne Edoms) とセパヌティナの城の頂きを指し、そこではエサウの子等即ち人々が Bēlati 及び Aphrodite 女神の像を建てており、祭の時には全裸の男女がそのまわりを七回旋回す

ね。そして次にはこの人々はお互に（不道徳行為によつて）けがれあへ、と怒りだる。又、シリア人 Ephraem (306-373)⁽⁵⁵⁾ によると、「イスマエルの人々（アラビア人）を Venus 女神が誘惑して来た。今やこの女神は Hagar の子等（アラビア人）によつても最も熱心に崇拜される。彼女は一人の女郎と同じものと考えられ、女共は…貞潔で節操のあるものは一人もなく、鳥のように（みわからぬ）交合する。…カルデア人の他に一体誰があの馬鹿いしい女神の祭を行ふ、その日は女たちが姦淫を行なうだらう」としたる。

これが等の文書中の Bālati-Aphrodītē (=Venus) は Allāt 女神を指してゐる。そのうちに一九三六年にハーベ海の Cos 島で発見された二語碑文⁽⁵⁶⁾にもにて確認された。それによると、ギリシア語碑文と “theā Aphrodītē (Aphrodītē 女神に)” とあり、それに対応するナバテア語碑文の部分には「女神 Ba'alāk」となつてゐる。アラビア人の Aphrodītē 女神、即ち Allāt 女神は Ba'alā とも称されたことが分る。而して、後者はシリアの大天神 Ba'al の女性形 Ba'alat と同じのである。Bēltis 無は Bēlati⁽⁵⁷⁾ はやのギリシア語形である。他方 Ba'alat, Bilit などシリアの碑文に現われる女神の本体は Astarte 女神であるむかづねおる。従つて、上田の二つの記事はボアラムド、シリアの他の地方と同じ大母神の生殖力に対する祭祀が Allāt 女神のために行なわれたことを示してゐる。

(E) 金星と聖なる日。しかし、シリアの Allāt 女神の崇拜は他の大母神崇拜より遅くと吸収されたのではなく、次第に進ぐるような独自の體制によつてローマ時代の太陽崇拜一神教 (“solar monotheism”) の形成にいて興味ある寄与をするに至る独自の性格も存続してゐた。やの 1 つは金星、とりわけ曉の明星としての Allāt 女神であり、他はシリア、アラビアで一般的であつた石碑として表わされた Allāt 女神である。

第一の金星としての Allāt 女神が、上述のやつた Ba'alat-Astarte よりの Allāt 女神の體代とも明確に離れていたことは、キリスト教側の史料を見ても分る。例如 Hieronymus (A. D. 348-420) の「アヤス書註解」(C. 5) に

「とつわけサラセン人（即ちアラビア人）は Lucifer を崇める」とあり、又スペインのキリスト教徒迫害に關する修道士 Gordianus の記述によつてゆゑひアラビア人の Lucifer 崇拝があつたことが分る。更に、Johannes Damascius の「異端譜」にも「曉をもたらす暁」の崇拜が見える。⁽³³⁾ わゝ一つの重要な証拠は、ナバテア人の定住地の「いド」あつた Negeb 地方の Elusa の町である。これはナバテア人が当地へ進出した前一世紀前半以来の商業上の要衝であつた。ナバテア語碑文の最も古いものの一つがその名を挙げてゐる。⁽³⁴⁾ これでは次稿で述べる「永遠時間」からの子神の各年ごとの生誕を祝う祭りが行われておる、「神々の母」の信仰と重要な関係があつたことが分るが、Elusa (Ptolemaios, Geographia, V, c, 15) から名称自体、アラビア語で金星を意味する Khalashat のギリシア語形である ⁽³⁵⁾。又、Haurān, Sinai, Hegra 等各地で Alasathos, HLTsT などの人名が出るが、これ等も金星の意味をもつ。⁽³⁶⁾

Lucifer ルカイフは、旧約聖書のイザヤ書 (XIV, 12. 「黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまつた」) のラテン語訳文中で用ひられてから悪魔を指すようになつたが、元来は「光をもたらすもの」(Gr. eōsphoros) の意味である。特に夜明け方に太陽に先がけて世界中に光をもたらすものであり、万物の生育に必要な熱の源である太陽の背後について、それを天空に送り出す天界の使者（暁）なのですね。⁽³⁷⁾ わゝいうわけで、人間世界にとつての根源的恩恵者としての天神としての性格におこり、Lucifer-Allāt 女神と Īrāniē-Allāt 女神とは一致してゐると見えよう。従つて、生育の神 Dūsarēs などいへば、この女神は生育する自然界 자체の生みの親であり、生育に必要な天の光の源泉である。

他方、既に Dūsarēs 神の研究の際に述べたこの神の石偶崇拜に関連した問題として、Allāt 女神の石偶についても知らなくてはならない。なぜなら、この点以外には Dūsarēs 神と Allāt 女神との眞の神話上の関係を知る手がかりがないからである。

既に記した通り、南アラビアではこの女神は白色の石偶として表わされたが、他にもそのような事実を記録した史料が

存在する。その第 1 章、Hieronymos の「Hilarion 聖人伝」⁽⁶⁵⁾ によると、ヤエスの時代のユダヤ初代の聖地(11世紀)⁽⁶⁶⁾ が「Cades の荒漠の中の Elusa に廟祠した盡」(ルルラサ) 例年の祭がおこるの毎年たちて Venus 女神の神殿に集めていた。しかし、彼等はその女神を Lucifer もしくは撒旦⁽⁶⁷⁾、サラセン民族(アラビア人)がその祭を執り行つてこだのあらん。しかし、彼等はその女神を Lucifer もしくは撒旦⁽⁶⁸⁾、サラセン民族(アラビア人)がその祭を執り行つてこだのあらん。人々は聖者⁽⁶⁹⁾が町にやつて来たる魔⁽⁷⁰⁾に祝禱を求めたが、「彼は人々が石(lapides) もの神を崇拜するよりと心懸願した」この記事はもとより Elusa には金星⁽⁷¹⁾の Venus 女神に年祭(anniversalia solemnitas) が催された、神体は石であつたしよく知られる。第 11 章、Zigabene の Euthymius (11~12 世紀)⁽⁷²⁾ によれば、Mecca には「Aphrodite 女神の祠⁽⁷³⁾」(ektypōma tēs Aphroditēs) が持つた大いなる石があつた、ルルサ Abraham も Hagar もの結婚の場所であつた、ルルサ⁽⁷⁴⁾ 又、Mecca のカーバ(黒い石) は「Aphrodite 女神の頭⁽⁷⁵⁾」、イスラエルの人々(アラビア人)が古来崇拜⁽⁷⁶⁾する大いなる石⁽⁷⁷⁾。彼等のテキベー⁽⁷⁸⁾などもいふてアラビアの町々には白色又は黒色の石があり、それが Aphrodite-Venus-Lucifer 女神の神体である、又 “hysterolithos”(女陰石) の存在が示すようにこの崇拜は生殖力に關するものであつたルルサ⁽⁷⁹⁾である。R. Eisler は新・旧約聖書中から石又は Hagar, Sela など⁽⁸⁰⁾の名の女が子を出るに關するの生殖力の信仰を「⁽⁸¹⁾聖書を研究」(「イサヤ書」51~2; 「マタイ傳」3~9; 「ガラテア書」4~24f.)、それはくアル人の宗教思想として傍系をなす者の方である、多分 Judah 地図の Amaziah (797~789 B.C.) の時代にくアル人がエジプトを支配した時に、アラビア系の石母神の信仰の影響を受けたのであらば、と推測した。

しかししながら、前稿で述べた通り、Dūsares 神の Petra (或は Haurān 地方) には魔⁽⁸²⁾に崇拜⁽⁸³⁾され、それがこの神の神観念の進化にむきない擬人化されるなど⁽⁸⁴⁾の変化を受けたが、勿論 Allāt 女神についてものうな進化は考へられてゐる。

Petra とは多くの石偶があり、しばしば一対をなしてゐる。例えば、市内の「極かじりの」には一つの大石柱 ("mazzeboth") が立つてゐる。同じく El Bared の山の上にも同様のものがあつて、更に郊外の Hor 山の頂上には藍緑色の白と赤色沙和の塊がある。これが等はそれを Dūsarēs 神と Allāt 女神とをあらわすものとされる。⁽⁷⁾ しかし、Robertson-Smith や Wellhausen のような初期の研究者たちが両神の関係を母子と断定したのに對し、Robinson や Horsefield のような二十世紀の考古学者たちがこれ等の一対の石偶を母子であつとも、夫と妻であるとも⁽⁸⁾ いふことになつたのはどうしてあるうか。その理由としては、その間に Cumont を中心とするニズム・ローマ時代の宗教研究がきわめて複雑化し、より多くの文献や考古学の史料や操作が要求され、それについて学者によつて様々な結論が導びき出されるという混乱が起つたことが挙げられよう。現在では、Sourdej の著作に見られるように各々の神性について詳細にわたつて史料を集めた上で論じられる反面、十九世紀の諸学説、又今世紀前半の Cumont 等の学説に見られるような各神性の信仰内容相互の大局部的な脈絡の研究は却つて否定される傾向にあるようである。しかし、その結果それぞれとの信者との関係が明確になり、かつてのように漠然と多くの神を崇拜する「多神教」の存在が問題にならなくなつた。他方、ある地域（例えばシリア）やある民族（例えばシリアのアラビア系民族）の宗教を統一的歴史的に理解出来るように再編成する必要がある。そして、そういう目的に對しては、Cumont の提出した「太陽崇拜一神教」("solar monotheism") の考え方は今でも充分価値のあるものである。

本稿では、Allāt 女神の他のシリアの大母神との類似、Arrianus や碑文から知られるその母神的性格が、この女神は「神々の母」(déesse panthée) であり、従つてゆい一柱の有力神 Dūsarēs とは夫妻を構成してゐたこと、Allāt 女神は万物を生み出すものであつて、更に生み出された万物を育てるもの、そしてそれ等にみのりをもたらすものであつたことを論じたのである。一方、Allāt 女神も又、シリアやアラビアの各地で石偶の姿で崇拜

れやたヒルハヅドサ Dūsarēs 神の眞ラドヌガ、その場合 Allāt 女神の口裡（カーベ）の方が宗教史上興味ある題を命じてこたへた。眞ねがぬ。たゞたゞ、初出は太陽神也、一神教にゆるべ、俗はムカルトスルア 起源の個々の東方宗教における口は救濟神を生む母神の母性説原理をもつて神格（petra genetrix）の爲めわざして画期的な意味を持つことだからである。次にせば口でもおる神々の中 Allāt 女神の進化をみると、口は Dūsarēs 神との最終的な關係を取るかとなつたのである。

註

- (1) Cf., G. Rösch, Das Synkretische Weihnachtsfest zu Petra, eine Studie zur Arabischen Religionsgeschichte, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 38 (1884), S. 643-646.
- (2) 『羅經』「張卦」37-2, pp. 91; 95.
- (3) Cf., F. Baethgen, Beiträge zur Semitischen Religionsgeschichte: der Gott Israels und die Götter der Heiden, 1888, S. 101-S. 102. Cantineau (Le nabatéen, II (1932), p. 169) も Dūsarēs, Allāt は母の聖ニヤリト人の Hārīsā, al-Gē, Sai 'al-Qaum などである。
- (4) G. A. Cooke, A Text-Book of North-Semitic Inscriptions: Moabite, Hebrew, Phoenician,
- Aramaic, Nabataean, Palmyrene, Jewish, 1903, p. 252; Cf., D. Sourdel, Les cultes du Hauran à l'époque romaine, 1952, p. 96.
- (5) S. Moscati, Histoire et civilisation des peuples sémitiques, 1955, p. 182.
- (6) う〇 Úranos ユウラトサ Baethgen (op. cit., S. 99) もアーリア Herodotus & Origenes (contra Celsus, C. 37) と見らる。Úranie 諸ガ神の Urania が田山形也、Arrianus がアルカトロス Úranie が天神の形也、Baal-shamîn が天神の形也、Arrianus がアルカトロス Úranie が天神の形也、R. Dussaud (La pénétration des Arabes en Syrie avant l'Islam, 1955, p. 46, n. 1) の羅もアーリア、二種類の Úranos の體後記 Allāt 女神の存在を羅もアーリアの體後記

- ent Civilization: Petra, Edom and the Edomites, 1930, p. 406; Cf., Baethgen' op. cit., S. 101) ザ Dūsarēs, Allāt は神々と太陽との親類である、 亜ヒリヤーが、前神と母神と太陽神との親類である。 トムヤル (羅福修羅)。 Rösch (op. cit., S. 651) ザ聖廟に祀る神の名ハラムバニ耶ハ祭事の廟也の羅耶ハ祭事也。
- (8) G. A. Cooke, op. cit., pp. 220-222, No. 80 = Cantineau, op. cit., II, p. 26-28 = Corpus inscriptionum semiticarum, II, 298.
- (9) G. A. Cooke, op. cit., p. 241, No. 94 = Cantineau, op. cit., II, p. 5 = CIS, II, 350.
- (10) E. Littmann, Syria, Publications of the Princeton Univ. Archaeological Expeditions to Syria in 1904-1905 and 1909, Div. IV, Sect. A, p. 43, No. 45. ノの禮文の羅ヤシトゼ、エ「ハヤハマ (人祭) の大頭の羅也 (神)」エ「ハヤニマ (神祭) の羅ヤシトゼ (祭壇)」エ「ハヤタマ (人祭) ノ、ササガニ」エ「ハヤタマ (神祭) ノ、ササガニ」の意の「神也」也。 Littmann ザヨの内騒也。
- (11) J. G. Février, La religion des palmyréniens, 1931, p. 5; R. Dussaud, Les arabes en Syrie avant l'Islam, 1905, p. 41; G. A. Cooke, op. cit., p. 222; E. Littmann, op. cit., p. 82.
- (12) Robinson, op. cit., pp. 127f.; G. Horsefield, Historical and Topographical Notes on Edom, *The Geographical Journal*, 70 (No. 5, 1930), pp. 385f.; Sourdel, op. cit., p. 62.
- (13) Robinson ザ羅ヤシトゼ、Petra の神也 (神廟) エ「ハル」の母神祭壇也。 神也 (神廟) ハヤハマ、羅ヤシトゼ (神像) ハヤハマの神也 (神廟) Dussaud ザハヤハ Dūsarēs 神像ハヤハマの神也 (神廟) ハヤハマ、ハヤハマ MWTB ジハヤハマ、ハヤハマ。
- (14) R. Dussaud, Les arabes, p. 41, n. 4. CIS, II, 350 ザ羅ヤシトゼ “throno ejus munito.” 羅ヤシトゼ HRYS' ザ神也 (神廟) “munitus” (“gardé.”) オハヤハマ形也。
- (15) G. A. Cooke ザナヨの神也 (pp. 222; 241) ザ羅ヤシトゼ (神像) MWTB ザ「Dūsarēs 神の羅ヤシトゼ」エ羅ヤシトゼ HRYS' ザ「羅ヤシトゼ」エ羅ヤシトゼ Encyclopaedia of Religion and Ethics (1917), art. Nabataeans, Vol. IX, p. 121. エ「耶」エ羅ヤシトゼ Cantineau, op. cit., II, p. 5, cf. p. 170; Robinson, op. cit.,

p. 407; A. Grohmann, Pauly-Wissowas Realencyclopädie der Klassischen Altertumswissenschaft, Art. Nabataioi, col. 1467). Février (op. cit., p. 239) も「彼」の語が用ひられたる、**Harîṣâ** ハリサ、**Allâh** Hommel もの語を収めたるに幾々の語源を擧げてゐる。それにもとづく、(ア) Negeb 地方の Dedan の碑文に ‘Al-**Harš** ハルス、HRYS’ が書かれてゐる。(イ) Delos 碑文に ‘Al-**Harš**’ (S. 604 und Ann. 1)、(ロ) Delos 碑文に ‘Al-**Harš**’ (S. 713, 3—700~450 B.C.)、(ハ) ‘Kais’ 神殿の奴婢の名標がおる、**Al-**Harš**** Harš がおる (S. 713, 3—700~450 B.C.)、(ク) ‘Kais’ 神殿の「太陽」の標記は **häräs** が写されている。この人名 (Job, 9, 7; Judges, 14, 18)、ヤマトの都主名 (Jeremiah, 48, 31; Isaiah, 16, 11) にゆゑの、ルネサンス、HRYS’ 女性崇拜の存在を示す、アルカイド、アーヴィング (ル) Kais 神殿の碑 (MWTB) がおる (S. 715)、(ナ) 標記は ‘Mótab-natijân, Mótab-kabta, Mótáb-madgab’ が写されている (S. 144; cf. S. 168; S. 686)。

(16) E. Littmann, op. cit., p. 96. ルネサンス、ルネサンス “Allah” の語を Sourdell (op. cit., p. 69) が Rabbel II (ルネサンス時代のもの) で、CIS, II, 170. Cf., Sourdell, op. cit., p. 70. 「Allât」の語の意味。

(68) R. Eisler, op. cit., p. S. 306.

(69) 「史前」37-2, pp. 99f. など擧げてあるが、Suidas (十日祭の神祇) のテキストによれば、「Theūsarēs 神、最もトルコトの Petra 即ち Arēs 神である。彼等の山はアレア Arēs 神が祭祀されるのでありて、やねは高や巨ハマーム (podōn), 十二ノマームの黒い方形の人工を加えなこ石也おる。それは金張りの台座の上に建立されており、彼等はそれに犠牲を奉げ動物の血を注がかひ。それが彼等の灌頂式である。社殿一杯に金が満ち、又多くの奉納物がおる。」 Suidas からとつたし頃やれる Cedrenus (A. 11-12 十日祭) では、Theūsarēs が Thēsauros (財の神)、黒い石が大あこ石いなりしこ。又トマスの Maximus (11 十日祭) のテキストは、「トラビア人たちは私の見たことのないものや珍稀なが、方形の石で出来た祭壇は私も知つてゐる。」

(70) Horsefield, op. cit., p. 386; Robinson, op. cit., pp. 120f; 133f.

(71) Cf., Robinson, op. cit., p. pp. 408-410.